Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

No.107
2011年4月18日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

表紙絵　祈る男達（画・甲斐大策）

自然の定めの中で人が生き延びる術を提示	中村　哲
東日本大震災で被災された方々へ～現地から寄せられたお見舞の言葉	
取水口改修と護岸工事、３５万人に恩恵～ＰＭＳ事業報告	ジア・ウル・ラフマン
現地の潤滑油になれるよう	杉山大二朗
増水を睨みながらの突貫工事で完了	鈴木　学
現地住民の強い意思で進む大工事	村井光義

ペシャワール会は、1983年９月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

自然の定めの中で 人が生き延びる術を提示

カマ第2取水口通水、ベスード護岸4キロメートル

「治水」という言葉は、英訳できません。おそらく、自然観が違うからです。和英辞典ではflood controlと出ていますが、どうも響きが違う。推測ですが、昔の日本人は自然を畏怖の対象にしても、制御したり征服すべきものとは考えなかった。治水にしても、「元来人間が立ち入れない天の聖域がある。触れたら罰が当たるけれども、触れないと生きられない」という、危うい矛盾の限界を意識していたと思われます。その謙虚さの余韻を、「治水」という言葉が含んでいるような気がしています。だから、工事責任者は必ず神仏に祈り、人柱となることも辞さなかったのでしょう。最近になってよく分かるようになりました。

PMS（ピース・メディカル・サービス・ジャパン＝平和医療団日本）院長
ペシャワール会現地代表　中村 哲

みなさん、お元気ですか。

大震災の様子がアフガニスタンでも逐次報道されていますが、みな日本がいったいどうなるのか、不安と同情を隠しません。日本の震災犠牲者に対して一般のアフガン人の同情が並みのものでないことは、彼らの表情で分かります。悲しみと悔やみの声を張り上げるでもなく、まるでわが子を失って茫然としているような、そんな悲しい眼差しで語ります。

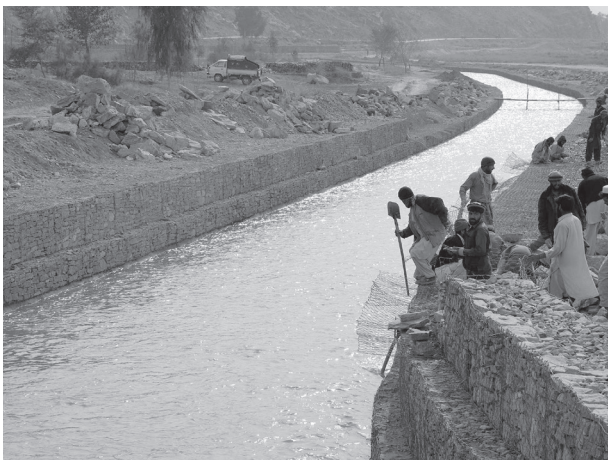
遠いアフガニスタンと日本。しかし、その遠さにもかかわらず、それだけの想像力を働かせられるのが不思議な気がします。過去、多くの肉親を失い、ひどい難民生活を余儀なくされ、累々たる屍の山を見てきた者は寡黙です。大げさな表現や通りいっぺんのお悔やみの言葉、巧みな議論や政治の話が、いかに虚しいかを知っているからです。

それでも、仕方なく日々の営みに追われるのは何処も同じで、働いて家族を養い、食べてゆかねばなりません。常々、ほとんどのアフガン人の願いは、「三度のご飯、故郷での平和な暮しだけだ」と述べてきましたが、日本の現状を遠くから見ていると今や他人事ではなく、複雑な思いがしております。

「現地から見た大震災」を述べようかとも思いましたが、小生も大方のアフガン人と同様、何もことばが浮かびません。ここはいつも通り、こちらの仕事の経過をありのままに伝え、励みにしていただきたいと思います。

カマ取水口の完成

さて、カマ用水路についてはこれまで詳しく述べてきましたが、去る三月二一日に事実上竣工しました。三月三〇日に、地元の人々が吾々（われわれ）PMS（ピース・メディカル・サービス・ジャパン、平和医療団日本）を招き、内祝いが行われました。みな震災のことを気にして、派手な催しを避けましたが、嬉しさに溢れていました。公の発表は行政側の都合で延期され、四月初旬に式典が行われます。アフガンでも日本でも暗いニュースが続く中、「カマ取水堰完成」は、少なくともアフガン東北部では、圧倒的な希望を与えるものでありました。それだけでなく、私たちが過去八年間、試行錯誤を重ねて得た努力の、頂点と云えるものだったのです。



通水直後のカマ用水路、手前に新設した水門がある

難関カマ取水口と干ばつ

カマ郡は人口三〇万人、耕作地が七千ヘク

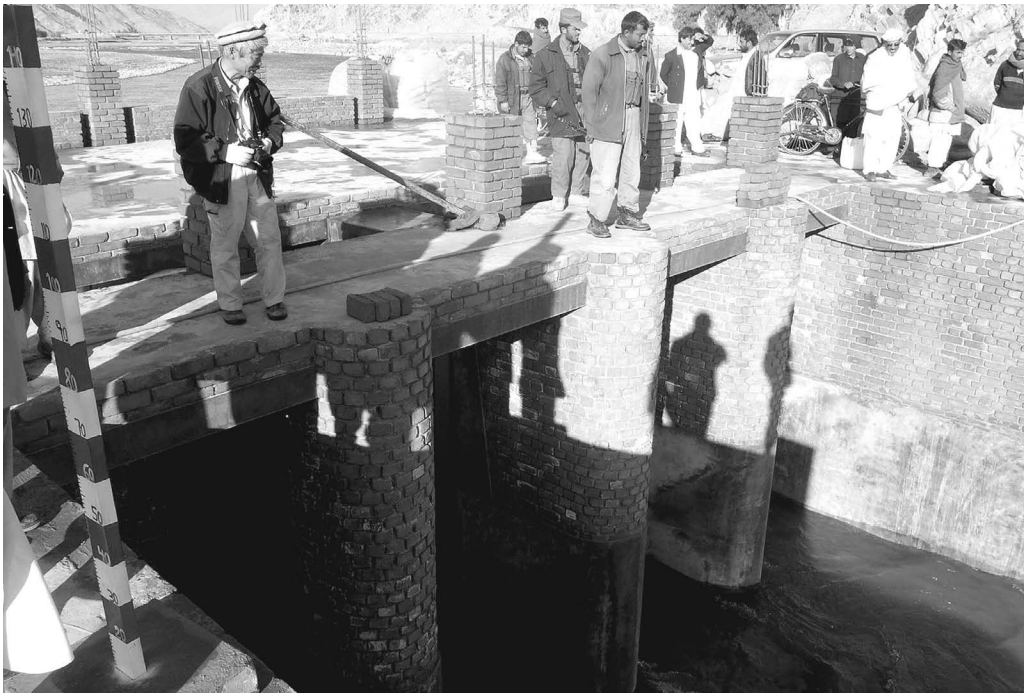
タール、東部アフガニスタンの一大穀倉地帯です。かつてジャララバードの南に広がるスピンガル山脈の麓が、アフガンで最も豊かな農業地帯を成していました。アフガンの生命線は水です。豊かな農業国を支えていたのは、高山の万年雪でした。冬の積雪が絶えず万年雪を補充し、夏に少しづつ解ける雪がこの一帯を潤していたのです。その万年雪が、近年、次第に減ってゆき、スピンガル山麓は六十数年前から、波状的な大干ばつに襲われました。

長老たちの記憶に新しいのは一九七〇年代に襲ったもので、ダウード政権の頃でした。この時は国家的な規模で対策が講ぜられ、難局を切り抜けました。実際、私たちが古い水利施設を見ていると、この時期に作られたり、改修されたりしたものが非常に多いのです。

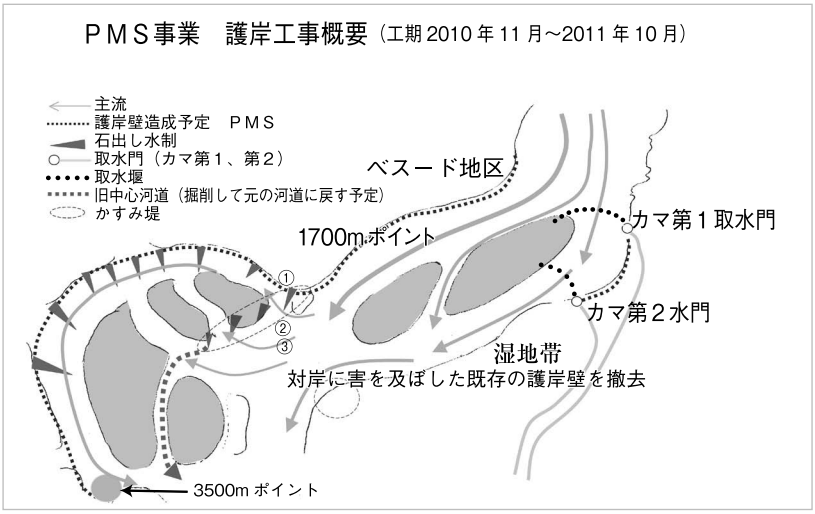
だがこの頃を境にして、パキスタンへ多くの者が出稼ぎ難民として逃れゆくようになりました。おそらく、人口増加と農地の乾燥化が、主に中小河川流域で、徐々に進んでいたのではないかと思われます（前後してクーデターによる王政打倒、続く政情混乱、ソ連軍侵攻が起きます。隣国では第二次インド＝パキスタン戦争があり、両国とも混乱の尾を引いています）。

しかし、二〇〇〇年に顕在化した干ばつは、ダウード政権時代のものを遥かに上回る規模でした。WHO（世界保健機関）を初めとする国際機関の訴えにもかかわらず、国際社会は逆に援助を引き上げたのです。その後の経過については、ここで繰り返す必要はないでしょう。戦乱はますますひどくなり、人々の生活は更に悪くなりました。

干ばつもひどくなっています。かつて栄えたジャララバード周辺農村はことごとく壊



カマ第２取水口の通水を見守る中村哲医師（左）と現地スタッフ



滅に陥りました。地下水が下がり続け、廃村が広がっていきました。その上、乾燥化と並んで、大きな洪水が起こりやすくなりました。

これは、温暖化のためで、巨大な貯水槽だった高山の雪があっという間に溶けてしまい、洪水が過ぎると今度は著しい乾燥状態になってしまいます。その状態が年々激しくなってきています。

四〇年前のダウード時代は、今よりは恵まれていました。東西の国際援助合戦があり、政権自体も、農業によって国を興して自存する、独立の気概に満ちていました。カマの取水口は、このダウード時代、旧ソ連の援助で建設が試みられたようです。しかし、クナール河の猛威は、直ぐにこの大規模な工事を台無しにしてしまいました。

クナール河はインダス河の支流で、ヒンズークッシュ山脈東部から水を集めます。地元民は、この河を「レワネイ・スィンド（狂った河）」と呼びます。その流域面積は九州の数倍あり、一大急流河川です。問題は、取水門や水路の構造ではなく、取水堰（ぜき）にありました。夏の激流が、取水門から伸ばした堰上げの突堤を、いとも簡単に流し去ってしまうのです。

ソ連を皮切りに、その後歴代政権が改修をくり返してきましたが、どれも成功しませんでした。理由の一端はこの災害に対する無関心にありましたが、技術的なことも大きな点でした。ロシアや欧米諸国のように平野が多い国と、アフガニスタンのような山の国とでは川の状態が違います。水門や水路がいくら立派でも、取水堰が不適当であれば、激しい流れで崩されるだけでなく、河の深さや形を変えてしまい、冬の水が取り込めなくなってしまいます。

こうして悪循環をくり返しながら、カマ地方は次第に荒れた土地になっていきました。生活できなくなった農民たちは、次々とパキスタンに「出稼ぎ難民」として逃れ、一時は人口が半減したと言われています。カマ取水口建設は、ナンガラハル州全体の、最大の悲願となっていきました。

ＰＭＳの試行錯誤と日本の治水技術

一方、私たちＰＭＳでは、二〇〇三年に全長二五・五キロメートルのマルワリード用水路建設に着手していました。だが、私たちもまた「取水技術」の壁に突き当たっていました。

ダムを作るような大工事を行えば、取水は簡単にできるでしょう。でも、そんな資金はないし、仮に出来たとしても、お手本にはなりません。それに、ダム建設が弊害を伴うことも少なくありません。そんな大げさなものでなく、アフガニスタンのどこでも、誰でも、多少の資金と工夫で出来るものが理想的です。

解決は意外なところにヒントがありました。近世・中世日本の古い水利施設です。当然全て自然の素材を使い、手作りで作られたものです。セメントやレンガ、重機やダンプカーがふんだんに使える私たちＰＭＳは、恵まれているはずです。更に急流河川が多いのも、アフガニスタンとよく似ています。ＰＭＳが日本の伝統工法に頼ったのは、決して偶然ではありませんでした。

取水口と堰について云えば、福岡県朝倉市の山田堰が大きな手本となりました。筑後川もクナール河も、規模こそ違え、ずいぶんと暴れ川です。調べれば調べるほど、これ以外に方法がないと思いました。しかし、ダンプカーや簡単な重機があるとはいえ、初めに考えたほど生易しいものではなく、マルワリード用水路の場合、六年の改修をくり返しながら実現しました。その成功の経験が難関のカマで生かされました。

カマには二つの取水口があり、第一取水口が三ヶ村・人口五万、一五〇〇ヘクタールを潤し、第二が五〇数ヶ村・人口二五万、五五〇〇ヘクタールを潤します。

問題は最大の第二取水堰にかかる夏の激しい流れを、いかに和らげるかでした。このため採用したのが河を分割して処置することです。この点で、山田・大石堰ら、江戸時代に

クナール河の主流河道回復工事

確立された「斜め堰」もまた、更に遡る時代にヒントを得ています。武田信玄らが行った「河道分割処理」の技術が、明らかにその源流だと言えるでしょう。これは、手に負えない河の水をいくつかに小分けして、それぞれを処理するものです。

カマ取水口では、上流側の第一堰を乗り越える水量を約半分以下に落として、分流の一つとし、それがそのまま第二堰を越えるように設計しました。実際の方法は、河の中にある島（砂州）を利用して流れを二分、取水口側と島の間を締め切って堰とし、越流水量を調整して、対岸側の流れとバランスを取るのです。

この場合、堰上がりで対岸に被害が及ばぬよう、もう一つの分流も幅と傾斜を調整します。つまり、工事で余分に発生する水で洪水が起こらぬように流すことです。

改修工事を終えたマルワリード取水堰

筑後川の斜め堰の場合も、同様な方法が採られています。今は古い図面でしか窺えませんが、「河床の全面堰上げ」と云っても、厳密には「複数の堰の並列」という方が正しく、実際には「取水用の堰」、「舟通し」と、いくつかに分かれています。特に筑後川では、幕府天領の日田から大川まで舟運が盛んで、「舟通し」という分流なしに幕府から許可は下りなかったはずです。さらに、それでも洪水を防げない場合は、「遊水地」に溢れさせる設計になっています（この点で現在の山田堰は、過去の構造と多少異なっていると思えます）。つまり、危ないところには初めから人を住まわせず、自然の都合を優先しています。

かくてカマ取水口は二〇〇八年十二月に着工、翌二〇〇九年二月に仮工事を完了、先に述べた河道分割処理、斜め堰造成を行い、年間の変化を見ていました。取水口と取水堰は、洪水にも渇水にも耐えるものでなく、なるべく長い期間の観察を必要とするからです。

自然の変化は一年間眺めただけでは分かりません。予測できぬ変化が沢山あり、そのつど適切な手を打たねば大変なことになるからです。例えば、河の水位一つとっても、そうです。数百年に一度の洪水と言っても、それは過去の出来事から推測した確率の数字であって、それに安住はできません。「百年に一度」が明日かも知れないし、二百年後かも知れない。まるで博打のようにあやふやな基準で私たちは生きていないでしょうか。

「治水」という言葉は、英訳できません。おそらく、自然観が違うからです。和英辞典では flood control と出ていますが、どうも響きが違う。推測ですが、昔の日本人は自然を畏怖の対象にしても、制御したり征服すべきものとは考えなかった。治水にしても、「元来人間が立ち入れない天の聖域がある。触れたら罰が当たるけれども、触れないと生きられない」という、危うい矛盾の限界を意識していたと思われます。その謙虚さの余韻を、「治水」という言葉が含んでいるような気がしています。だから、工事責任者は必ず神仏に祈り、人柱となることも辞さなかったのでしょう。最近になってよく分かるようになりました。

大洪水とJICA委託事業

河川工事の期間は限られています。水位が下がる晩秋から早春までで、間に合わないと一年待たねばなりません。二〇〇九年夏が無事に過ぎ、同年十一月から翌二月まで多少の改修を施し、第二堰の水門・水路改修だけをやれば何とかなると信じ込んでいました。二〇一〇年夏、この思い込みが微塵に砕けました。大洪水の到来です。七月三〇日、長老たちの昔話や岩盤の水の痕跡などを基にして、安全レベルを決めていたのに、それを易々と乗り越える濁流が第二カマ用水路の中に流れ込み、対岸のベスード郡を襲いました。

現在までアフガンでは、取水量を川際で調整する方式は一般的でなく、いったん取り込んだ過剰な水を村に着く前に川に捨てる方式です。流入した水は異常な量で、排水施設の機能を超え、あわやカマ下流域が水没寸前となりました。必死の突貫工事で余水吐きの直前で、用水路土手を切り崩し、危機一髪で難を逃れました。

ベスード地区の連続堤防。昨年の大洪水で村や畑が水没した

この一週間前に偶然、現場視察に来ていたのが、JICA（国際協力機構）アフガン所長でした。ともかく公的な立場の人で現場を実見して、技術者として理解した日本人は、同所長が最初でした。現場を重視する者は、どんな立場の人でも実際的です。PMSが逼迫した財政で完成を目指していることを知ると、復興支援の一環で協力がありうることを知らせてくれました。厚意をありがたく思いました。

「これまで募金だけでやってきたからこそ、自由に実のある仕事が出来てきた。これからも方針を変えないが、河川工事は改修を重ねるうえ、膨大な物量が要る。PMSは確かに壮大な挑戦を行ってきたが、全アフガンに展開するのは不可能だ。将来を見据え、良心的な人となら誰とでも協力すべきだ。美談ではなく、困ったアフガン人が一人でも多く助かることが主眼であり、日本人としての節と気概を共にすべきだ」と思いました。

こうして最大の残余工事、カマ第二堰と取水門、主幹水路一キロメートルを「委託事業」として実施できる期待が高まっていました。そこに大洪水だったのです。

八月十四日に第三波の洪水がひき始めるのを待ち、直後に交通路敷設を開始、秋の工事の準備に取り掛かりました。これまで財政の心配で秋冬の限られた工期の準備が遅れ、苦杯をなめたことが一度ではありませんでした。

それに今回は、大洪水の被害が既設のマルワリード用水路の至る所に及んでいました。取水堰が壊れ、土石流の横断箇所の至る所で大小の決壊が起きていました。PMSが手掛けたシェイワ取水口では河道が変化して取水困難となりました。開拓中のガンベリ沙漠では、猛烈な鉄砲水で異常な水量が排水路を下り、排水施設の見直しと全面改修が求められていたのです。

技術の粋・職員の気概

こうして、二〇一〇年夏に開始されたPMSの仕事は、過去二八年の現地活動で最大規模となりました。年度内に完成せねばならぬ主な河川工事は以下の通りでした。

・二つのカマ取水堰・主幹用水路の完成
・対岸ベスード郡の護岸四キロメートル
・マルワリード取水堰の復旧
・ダラエヌール土石流路の浚渫
・シェイワ取水堰の河道回復
・ガンベリ沙漠開拓・排水路全面改修
・ガンベリ隣接の湿害地処理の拡大

日本側のペシャワール会は腹をくくり、募金活動に全力を挙げました。万一の、公的資金を返却せねばならぬ事態も想定、底を尽きかけた財政回復が最大の課題となっていました。

一方アフガン側のPMSでは、住民たちの期待を一身に背負い、作業の効率化に力が注がれました。組織の思い切った簡素化、勤倹節約を掲げ、「日本の善意を無駄にするな」が合言葉となり、ジャララバード事務所の非常態勢が敷かれました。

いったい半年でこれだけの事が出来るのだろうか。誰もがそう考えましたが、六〇万農民の命運がPMSに掛っており、事業放棄は論外でありました。やらねば組織解体も辞さずとの背水の陣でした。こうなれば、もはや国家的事業です。おまけに治安が悪化の一途をたどる中、一民間団体たるPMSが手掛けることに疑義をはさむ意見さえ日本側から出され、哀しく思うこともないではありませんでした。これは少数意見ではありましたが、無政府状態で国家の手が既に及ばなくなり、多くの人々が飢餓に直面している事情は、日本で正確な理解を得るのが困難だったのです。

しかし、勝算がなかった訳ではありません。初秋までにカマ工事現場の交通路敷設、予測される機械力の算出と貸出業者との契約、住民対策、石材の採取・輸送、施工順序の立案など、準備を周到に行い、クナール河の水の低下を見ると同時に、先ずは比較的小規模な工事から始めました。要は、作業地の分散を極力避け、機械力と労働力を集中的に運用することです。

仕事のピークを真冬の最も水位が下がる時期に設定し、最大の物量を要するベスード護岸とカマ取水施設建設工事を短期決戦で片づけ、増水期でもできることは後回しで考えました。相手が人間なら取引もできますが、自然と交渉することはできないのです。

職員たちの士気の高さ、八年間実戦で鍛えた技術が大きな原動力となりました。二〇〇三年にマルワリード用水路建設が始まった頃に比べると、コンクリート打設、鉄筋作業、蛇籠生産と設置作業、植樹、盛り土などの手作業、ダンプや重機の誘導、水盛りによる測量、あらゆる面で熟練工の域に達していた五〇〇名の作業員が居ました。特に二〇〇八年八月に日本人ワーカーが一時全員引き揚げた後、強

生長したガンベリ沙漠の防風林。左手に黒く見えるのは居住区の基礎

い責任感を持つようになり、おそらくどこを見渡しても、これほど強力な建設集団はないと思われました。レンタル重機の運転手たちも、長年PMSの工事に従事してきた者がほとんどで、私たちのやり方を熟知していました。

こうして、二〇一〇年十二月から三ヶ月間、手持ち重機を合わせると、ダンプカー五四台、掘削機十一台、ローダー八台、削岩機二台、舗装用ローラー三台が常時稼働、作業員も全体で六〇〇名を超え、必死の作業が敢行されました。カマ取水施設、ベスード護岸、ガンベリ沙漠開拓、マルワリード取水堰改修、排水路整備が同時進行で回転していたのは殆ど奇跡的と思えました。

しかし、さすがに四〇キロメートルにわたる戦線の監督は出来ません。旧ワーカーの鈴木学がカマ第二取水施設に張り付いて指揮を執り、ジャララバード事務所会計で村井が奮闘しました。彼らが居なければ、この半年を無事に過ごせなかったでしょう。初めは現場に多くの日本人を置くつもりでしたが、情勢がこの二、三年でずいぶん変わっており、異なった事情が分かるまで時間がかかります。邦人派遣のマイナス面を危惧し、少数に絞りました。身辺保護は、決して武装警護をつけることだけではありません。敵を作らぬこと、毅然たる完全中立を厳守すること、そして誰が見ても良い結果を生むことです。そのために費やされる水面下のエネルギーは膨大なものがあったのです。

住民たちの熱意

住民たちの協力はぜひ述べておかねばなりません。特にカマ長老会の決定が威力を発揮しました。カマ郡はパシュトゥン民族のモハマンド部族で占められ、地縁・血縁が強固です。無政府状態のアフガン農村で最大の秩序を担うのが地域の長老会です。

農村秩序は、この十年間、特に大都市周辺で、欧米軍の買収工作と武力威嚇、軍閥の跋扈などで緩みが目立っていましたが、カマ郡は例外的でした。「ひと冬分の小麦収穫を潰してもよいから完成していただきたい」と申し出ました。

飢餓線上にある貧しい農民が多い中で、この決定は容易ではなかったと思います。当方もその熱意を汲み、作業にさらに熱が入りました。結局、昨年完成していた第一取水堰が健在で、あまり水が要らない小麦栽培に影響は出ませんでしたが、住民と一体になった協

一面の小麦畑になったガンベリ沙漠の試験農場

マドラサの寄宿舎建設は最後の段階。２段ベッドも準備（左上）

力が大きな推進力になったことは言うまでもありません。

カマ取水堰完成の意義

ローマは一日にして成らず。その通りだと思います。長い地味な積み重ねの過去の上に、現在があるのだと思いました。紛れもなくPMS活動の頂点がこの半年間に集約され、力を発揮しました。

「カマ取水堰完成」は奇跡的な壮挙として地元で報ぜられましたが、実は奇跡ではありません。健全な人間の感性が組織され、共感が共感を呼び、今回の成功につながったのだと思います。言葉ではなく、確かに厳在する良心が行動を以って動き出すとき、語らずとも訴えかける何ものかがあるのでしょう。

二〇一一年一月十五日、懸案のカマ第二取水口で試験通水が成功し、これにてカマ全体への送水可能量は一日一〇〇万トン、全域が救われました。難民化していた十五万人もの人々が続々と帰農し、安定した食物が保障されました。世代から世代にわたる長い悲願の実現を目前に、皆が喜びをかみしめています。

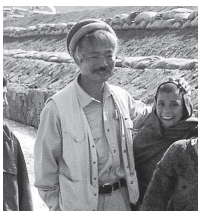
対岸のベスード護岸四キロメートルも三月十九日、冬の基礎工事を間一髪で終え、浸水の危険はひとまず去り、同時に夏の洪水対策（護岸のかさあげ）に取り組んでいます。一方、別部隊はガンベリ排水施設に集中し、最後の洪水対策が行われています。なお、危うい場面もありましたが、重症と死亡者は出しませんでした。

最後に、この取水口の最も重要な意義は、沙漠化という避けることのできない自然の定めの中で、人が生き延びる新たな術を提示したことにあるのではないかと思います。これまで一般に行われてきた取水技術が最近の気候変動に追いつけず、そのため食糧生産が低下しています。アフガニスタンは戦争では滅びませんが、渇水によって滅び得るでしょう。だからと言って、手をこまねいて眺めるべきでしょうか。人は生きることを許されているし、相応しい恵みも与えられています。私たちの活動が、人間と自然の関係を問い直し、人の分に応じた自然の恵みを顕わし、望みを分かち合えることを祈り、感謝を以って長い報告を終えたいと思います。

＊

日本から衝撃的な大震災のニュースが伝えられたのは、このような作業のただ中でした。その後、膨大な犠牲者が明らかとなり、原発事故が連日アフガニスタンでも報道されています。

今は多くを語ることばがありません。しかし、私たちの現地活動から見えるものもあります。どんなに時代や地域が異なっても、人間の変わらぬものは変わらない。その事実をかみしめながら、人々の無事と復興を心から祈っております。



中村（なかむら）　哲（てつ）…九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二七年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二五・五キロが開通した。年間診療数約七万人（二〇〇九年度）。

東日本大震災で被災された方々へ

～現地から寄せられたお見舞の言葉～

中村哲医師より

現地に戻った直後の三月十一日、悲報を聞きました。

心よりお見舞い申しあげます。

大震災の悲劇は連日アフガニスタンでも報ぜられ、職員・作業員ともども、わが事のように悼み、日本に同情を寄せてくれました。皆よく震災の模様を熟知していて、こちらが驚くほどでした。モスクでは「新年の祝日（アフガンでは春分の日が元旦）でも、めでたいと言うな」と自ら喪に服するような説教が行われ、地域長老会や行政の役人も次々と弔意を伝えに来ました。義援金を募ろうとした職員も居ました。しかし、どうしたら良いのでしょう。「今はただ日本の人々の無事を祈り、動揺せずに目前の責任を完遂せよ」としか伝えようがありませんでした。

その後も日増しに地震の規模と犠牲の大きさが明らかとなり、これからどうなるのか、日本に全面的に頼るＰＭＳ内でも、次第に不安と動揺が広がってゆきました。

しかし、自然は頓着しません。雪解けが始まり濁流が押し寄せ始めた中です。間もなく河の工事ができなくなります。現場作業の手を緩める訳にはいきません。異常な緊張感で連日突貫工事を続け、増水の始まる中、三月十九日、危機一髪で中心河道の掘削、河道分割を終えました。普段なら無事に冬季の工事を終えた喜び、苦労話のひとつも伝えたいところですが、大震災に比べれば、大したことでもないような気がしています。でも、改めて思ったのは、人の命は数や国籍ではなく、目前の困窮した人々に思いを致して手をさしのべること、そのことで当方も救われるということです。

現地では外国軍の横暴が目に余り、一種の終末的な感情さえ抱かせます。建設したマドラサの脇でわざと派手な演習をして威嚇したり、空爆で罪のない人々を的にしたりします。それでも、逃げる場所のない多くのアフガン人は、黙々と働き、その日一日を無事に過ごせたことに感謝します。その彼らが心からの同情を以って日本を眺めていることが、ことのほか温かく感ぜられます。

日本もたいへんだとは思いますが、頑張ってください。どうぞ皆さんもお元気で。

ＰＭＳ副院長

ジア医師より

ＰＭＳ　アフガニスタンスタッフより日本の皆様へ。

日本の皆様に長期に渡って支援をして頂いているＰＭＳと東部アフガニスタンの人々は、日本の被災された皆様に深甚なるお見舞いを申し上げるとともに、犠牲者の皆様に謹んで哀悼の意を表します。

私たちは被災者の皆様の為にいかなる支援もさせて頂く所存です。

全ての日本の皆様に神のご加護がありますように。

Drジア・ウル・ラフマン

ＴＭＳ（タウンメディカルサービス）代表

イクラムラ氏より

親愛なるペシャワール会会員の皆様。

このたびの巨大地震と津波によって被災された多くの日本の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

テレビから次々に伝えられる深刻な事態に胸を痛めております。この大惨事の犠牲になられた方々に心からのお悔やみを申し上げます。

私たちは日本の皆様に二七年間も支援して頂きました。

今、私たち全員で、皆様の為に祈っています。そして、祈る事以外に私たちに出来る事があれば、何でもお役に立ちたいと思っています。

皆様の為に何かお手伝いをしたいと心から願っています。

素晴らしい国日本の、素晴らしい国民の皆

様が、神のご慈悲によって一日も早くこの危機を乗り越えられますように。

現地スタッフ全員より心をこめて。

イクラムラ　カーン
（旧ペシャワール会病院事務長）

取水口改修と護岸工事、三五万人に恩恵

～PMS事業報告～

PMS副院長　ジア・ウル・ラフマン

●ジャララバード事務所の業務●

PMS（ピース・メディカル・サービス）の事業を円滑に遂行する為に、各セクション（資機材調達・輸送、燃料・車両のメインテナンス、会計、営繕、食材の調達）の責任者を毎朝集めたミーティングで、現状報告とこれから行うことを報告し合っています。資機材調達では購買委員会を設け、品質や価格調査を行っています。

中村医師や日本人ワーカーの安全対策をアレンジするのも、事務所の重要な役割です。

半年毎の政府への報告書作成・提出、医療や灌漑に関する行政の会議への出席。政府関係者の現場視察に対する応対。PMSと政府ならびに地元住民との良好な関係構築にも配慮する努力をしております。

水路や農業事業の現場では、スーパーバイザーのパチャ・グルとアジズ・ラフマンが現場を廻りながら現場監督から毎日の作業状況報告を受けています。同時にレンタル重機の稼働時間や日雇いの作業員の雇用数を調べ、ジャララバード事務所へ報告しています。この報告を受け事務所会計では賃金やレンタル料金を計上しています。

●事業の現状●

〈カマ第一、第二取水口〉

カマ第Ⅰ取水口工事を完了しました。カマ第Ⅱ取水口は現在順調に進行中。第Ⅰ、第Ⅱ共に付帯工事（水門番小屋建設や護岸の為の植樹など）が続けられています。カマ地区では約十五万人が帰農しました。第Ⅰ、第Ⅱの取水門完成により約七千ヘクタールが耕作可能となり、約三〇万人が恩恵を受けることになります。

〈ベスード地区護岸〉

昨年夏の大洪水で水没したベスード地区（クナール河右岸）の護岸工事では、全長四・一キロの工事が進行中です。推定面積一千ヘクタール、四～五万人が大洪水から守られることになります。

●農業計画●

ガンベリ沙漠に開墾中の試験農場一八〇ヘクタール中、約三〇ヘクタールが耕作されています。残りも必死に開墾を進めています。また、シギ村やシェイワ村にある四五〇ヘクタールもの広大な湿地帯では、十キロ以上にも及ぶ排水路の整備により、ほぼ一〇〇パーセントが耕作準備状態になっています。

〈植樹〉

護岸、防風、防砂林、養蜂、果樹園造成のため、これまでに約六〇万本に及ぶ様々な樹木を植樹しました。

●寄宿舎建設●

マドラサの敷地内に建設中の寄宿舎は完成間近となりました。

＊マルワリード用水路では、大洪水による取水口の大改修工事が終わり小麦の播種に間にあいました。

●医療●

ダラエヌール診療所は、以前と変わりなく周辺住民の診療に力を注いでいます。

◎ワーカー通信

現地の潤滑油になれるよう

ペシャワール会事務局・現地連絡員
杉山大二朗

農薬は使わず

会計の部屋で打ち合わせと雑事を済ませて、私は農業のアドバイザーであるハニフラさん（会計の責任者も兼任している）とガンベリ沙漠にあるＰＭＳ（Peace Medical Services Japan、平和医療団日本）試験農場へ出掛ける。

数年前までこのガンベリ沙漠は、地平線の向こうまで雑草と砂しかない文字通りの沙漠だったが、今では人家も増えて自分達の畑も耕して緑地が増えてきた。

農場に到着すると、農業チーム責任者であるアジマール青年がやって来て、すぐにその場で打ち合わせを始める。

「さっき麦畑を見回ってきたけれど、麦の育成具合が疎らな所があるんだ。皆で一緒に見に行こうよ」

「そうだな、ハニフラさん。一緒に見に行こう」

「今日は時間がないから、二手に分かれて他の現場に行ったほうがいい。食事時間のミーティングで会おう。その時に他の現場監督にも原因と対応策を訊いてみよう」

食事を終えてお茶を飲みながら、今日の現場作業の記録を付けながら現場監督たちと問題点を挙げる。

皆がお祈りの時間を忘れて、色々な意見を出し合っては「そりゃいい！」「いやいや、俺の家ではこういう風に……」と丁々発止の掛け合いを繰り広げる。

時折、彼らの口から躊躇（ためら）いがちに「農薬を使えば楽だぜ」という意見も出るが、「農薬は使わんって言ったやろ？」と窘（たしな）める。

素人の私も彼らと同じように「農作物が病気になったら、農薬も必要なのでは？」「しかし農薬を使うのは仕方がないことなのか」と素朴な疑問を持っていた。

使わない理由は色々あるが、事実として農薬は高価である。そう簡単に買える代物ではない。

農薬を使わないという方針を打ち立てたが、実際にはそれに代わるやり方はあるのだろうか、農業経験の殆どない私はどうしたものかと悩んだ。

しかし現地スタッフの殆どが家で農業を営んでいるので、彼らの豊富な経験と知識を出してもらって私自身も勉強しながら仕事を進めていけばいいのだと思い直した。いつまでも思い悩んでいても仕方がない。

まだ吾々（われわれ）の農業事業は準備段階であるが、なるべく農薬や化学肥料を安易に使わず、アフガニスタンで何千年と営まれてきた伝統農法を踏襲して、お金を極力使わずに土地に合った作物を育てるというのが吾々の方針である。

麦畑でスイカ栽培用の溝を造成中（第一試験農場）

堀の中に、生ゴミを溜めて堆肥にする

彼らと共に畑で汗を流して色々なアイデアを出しながら失敗を繰り返す毎日だが、自分にとっては新しい発見の連続で役得だろう。

また自分のするべき役割を考えたが、ド素人でも彼らとの人間関係を保つ潤滑油の役割を担えばいいのだ。私は謙虚に彼らの話に耳を傾け、共に汗を流す以外に手立てはない。

そして将来は彼ら自身の手で畑を耕し、安価で安心できる作物を育てて食べていけるようにしなくては意味がない。農薬は彼らにとっては高嶺の花であり、経済的に無理のない緑肥や堆肥を自分達でつくる農業が大事だ。

翻って彼らの先祖がずっとやって来たことを続けることが彼らにとってすんなり受け入れられる要素でもある。そうでなければ長い年月苦心しマルワリード用水路をこの不毛の沙漠に引かれた中村医師に顔向けできないではないか。

腹いっぱい食える日まで

今のシーズンは麦がメインで、空いた土地は米の苗の育成の為にシロツメクサ（クローバー）、ゲンゲ草、菜種等の緑肥を育てている。今年はスイカと米もアフガニスタン、パキスタン、日本の三品種の育成を考えており、緑肥と堆肥（生ゴミや動物の糞集め）の準備に忙しい。勿論（もちろん）、天候や気温と水温の記録、収穫した種も来年度に使うよう管理している。

研究課題は時期をずらした作付け、緑肥の比較、品種別の育成具合などで、バリエーションはいくらでも組み立てられる。そのうち収穫も増えれば職員たちに給金ではなく現物で支給できる日も可能だ。たとえお金が紙切れ同然になっても食料さえ確保しておけば、怖いものはない。自分達の食いものは自分達でつくる。

独立独歩の基本は自給自足が要諦であり、不況になろうと自分達で自給できるという強みはお金に勝る。

夜中に白い画用紙にあれこれガンベリ沙漠の農場地図を描き、どんな作物を育てようかと思案する。

農作物が大量に収穫されて、彼らやその家族たちが腹いっぱいに飯を食う姿を想像するのは何より愉しい。

共に苦楽を分かち合い収穫を得て喜びあえることが何より尊く、ほんの少し私もお役に立つことができたら、これほど嬉しいことはない。夢はますます広がるばかりである。

＊

この原稿を書いている時期に東北地方での未曾有の大災害を聞き、衝撃を受けています。アフガン人スタッフもラジオで大災害の様子を聴いており、我がことのように心を痛めています。被災者の方へ心よりお見舞い申し上げます。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

増水を睨みながらの突貫工事で完了

ペシャワール会ワーカー
鈴木　学

取水技術を革新した中村医師

いまアフガニスタン東部、クナール川沿いの取水口（おおむね各村には一つ以上ある）において、アフガンの伝統的な取水技術では冬季、全く取水できていなかった。近年の最大の理由としては、冬季の積雪量減少により、根雪が十分山々に堆積しないことがあげられる。このため、春になると山に積もった殆どの雪は一挙に溶け、クナール川は冬の真っ青な清流から増水した濁流に一変する。

雪が夏まで残らないため、雪解け水を利用する現地の農業は夏以降致命的な水不足に直面する。また夏に大量の雨が一時的に降ることにより、山に木々がないアフガニスタンでは容易に洪水が発生し、これらの洪水によって冬季に住民が苦労して作った堰（一般に幅が狭く堰高は高い）はクナール川の激流に流されてしまう。

さらに、河道は毎年蛇行変化するため、当然河川幅も広く存在するのだが、そこに秋から冬になると年々減り続けている超低水位の河道が、これまた住民が努力して堰を伸ばせば伸ばすほど遠くへ逃げてしまう。この結果、従来の堰では冬季の取水が全く出来ず小麦は播いたものの雨水頼みにならざるを得なかった。昨年の十月半ばから四ヶ月間、まともに雨が降った日は三日程しかなく、河川から安定して取水が出来ない地域では、小麦が半分取れる年は良い方で、その後夏になると作物は殆どできない。

以上のような状況下で中村医師がやっていることは、ひと言で云うと「河川からの取水技術の革新」である。乾燥化が進行するアフガニスタンで、これ以外に人々が生き残っていく道はないと先生は確信しており、カマ取水口およびそれに関連する工事は、そのモデルとなる可能性を十二分に持つ最重要な場所だといえる。

増える見学者

マルワリード水路、シェイワ水路において取水口構造物の工事を担当してきた縁でこのたび再度協力の要請があり、昨年十月半ばより中村医師とともに現場工事に携わった。

旧知の現地スタッフ、作業員たちと増水を睨みながらの猛烈な突貫工事を開始、カマ第二取水口取水門と沈砂池末端に位置する緊急時排水門を併設した調整門の主要工事は三ヶ月後にほぼ完了し、一月十五日通水試験に成功。その他にカマ第一水路において、取水口水門のかさ上げ（〇・五メートル）工事や、二〇年以上土砂で埋まっていた崖下の暗渠（カマ第二取水口直近区間。堤防の広さを確保するためには土砂で完全に埋まったこのトンネルを復旧させ、カマ第一水路を現在の位置よりさらに崖側へ移し、その分堤防護岸を広く取り強化するという、極めて重要な意

カマ第２取水門建設をすすめる鈴木ワーカー

味を持つ。ソ連が建設。中村医師曰く、これぞほんとの〝掘り出し物〟改修工事などを終え、中村医師が天王山と位置づける旧主流河道の復旧工事に駆けつけたところでタイムアップとなった。

二つの取水口という地理的条件を最大限生かし、河を分割して処理する中村医師の取水堰の技術と共に、取水口から一キロメートル地点までに、沈砂池と緊急排水門を備えた調節門がある。対岸を含めた日本古来の多様な護岸技術と併せて、中村医師はここにひとつの取水技術体系を実現させた。ジャララバードから二十分という距離も手伝い、通水以後外国人含め見学者が続出。中村医師は今後伝播していくことを確信している。自分にとって三つ目となったカマ取水口、及び付属施設は十分な機能をもって今後住民たちの暮らしを支え続けると確信している。

「こんなに早く水が来るなんて」

水が通った後、中村医師とカマ地区の末端まで送水状況を見に行った。どこまで行っても新緑の小麦畑が続き、住民の顔は皆穏やかで、落ち着いていた。水の具合はどう?と尋ねると、「ああ十分だよ」と笑う。「こんなに早くここまで水が来るとは思っていなかったんだ。小麦を播き損ねたよ。だから今玉葱の苗を急いで植えている。玉葱はまだ間に合うからね」と。一家総出で玉葱の苗を植えてゆく。

昨夏のパキスタン・アフガニスタンにおける大洪水、農産物に壊滅的な被害が出た。野菜は軒並み高騰、特に料理に欠かせない玉葱は何倍にも値段が跳ね上がり庶民を泣かせた。でも僕は思う、今年は小麦も米も玉葱も庶民の喜ぶ値段で市場に並ぶだろうと。すべてが悪くなり続け、希望を見いだせないなかで、これこそ希望そのものなのだ。

アフガンで命の水を引き入れるために悪戦苦闘して帰国すると、日本の農業や農地、命の源である山林の水源まで危機にさらすような、とんでもない協定（環太平洋経済連携協定、TPP）を進めようとする政府や経済界の動きが、米国の本当の狙いを知らされないまま伝えるマスコミによって煽動され呆れてしまった。中村医師からもお許しを得たので、これからも一生懸命農業に励みたい。

この度の冬季集中工事に際して、日本側から支えて頂いた事務局の方々、藤田さん、鈴木祐治くん。先に現場に入り測量を担当して頂いた石橋さん、手島さん。現地で大変お世話になった杉山さん、村井さん、そして中村先生。困難な状況下、今回も良くついてきてくれた現地のスタッフ、作業員たち。この仕事の重要さを理解し、協力してくれた家族と妻に感謝しています。皆様、御協力本当に有難うございました。

サファル・バハエル！（良い旅を）――――――7

プリ・フムリ

甲斐大策

昔、ヒンドゥークシ北麓の流れにかかるプル（橋）の手摺りの上で、旅に出て戻らない恋人を待つ娘がいた。いつか娘は白いフムリ（鳩）に姿を変え、赤い眼で旅人たちを見続けた。人々はこの地の宿場をプリ・フムリ（鳩の橋）と呼ぶようになった。

イサンは、トルクメンのナン屋である。この日イサンは、市長発注の仕事の愚痴をこぼしながら、先祖代々継いできたマーヤ（酵母）と窯で焼いたナンを、太い指先でいじくる石工サイードに苛立っていた。

「市長とは五十年前の割礼兄弟なのに、橋脚補修は半額俺の責任だと。国営ホテル取り壊しの手伝い料にしても、カーブルの将軍たちがやっていた怪し気な映写会の古い十六ミリフィルム、それとストーヴの敷石にしていた、スルフ・コータルの石段の白大理石……。」

「サイードよ、昔々から渡橋料とっておけばよかったな。アレクサンドロス、カニシュカ、成吉思汗、そうそうロシアの戦車、アメリカの装甲車……。」

からかわれたサイードが真顔になった時、イサンの長男が奥から影のように現れ、モスクの集会に、という。頭髪も口周りの髭も伸び放題である。出かけるなら、と頼みごとを口にしかけたイサンを無視し、長男は通りへ出ていった。

店先に、イサンの兄が経営する隣のレストランの車が停り、窓から格子縞の背広に赤ネクタイの甥が、助手席の上の甥と共に満面の笑みで、カーブル、カーブルという。君は月光に抱かれ、……と節をつけて声を上げる。カーブルのテレビ局で、のど自慢に出るという話はきいていた。

急発進した車の土埃の中へ出ていきながら、サイードが吐き捨ているようにいう。

「タリバンの坊やにのど自慢の坊やかい！」

イサンは、サイードが傷ものにしたナンを力一杯、窯の火口に投げ入れた。

二羽のカササギが啼き交わしながら西の街道、スルフ・コータル（赤い岡、カニシュカの拝火教神殿址）の方角へ翔んでいった。

現地住民の強い意思で進む大工事

ペシャワール会事務局・現地連絡員　村井光義

資機材の手配に奔走

私は冬の大工事期間に初めてジャララバードにいた。事務所勤務なので身を以て現場を体験した訳ではないが、話に聞いていた以上の気迫が中村医師初め職員や作業員から伝わってくる。それは河の水位が上がるまでの時間との戦いであり、人が食っていけるかどうかの真剣勝負であった。八年間事業に携わっている職員達は慣れていて、現場では熟練工となった彼らが中村医師の指示に従って作業し、事務所では現場からの資機材（鉄筋、セメント、蛇籠用ワイヤー、コンクリートミキサー、手押し車、足場パイプなど）のリクエストを受け、諸般の手続き（見積もり、倉庫内の在庫照会）を踏みながら的確に現場へ輸送、重機が故障すると速やかに修理し工事進捗に遅れがでないように手配した。

この数カ月間は目の回る早さで過ぎ、振り返っても細かな記憶が無い。現場と比べると体力の消耗は少ないものの、朝食の量を増やし、普段全く食べない果物を食べ、調子が悪いと感じればひたすら寝て、体調管理に努めた。体力は有る方なのだが、一度風邪をひくとなかなか治らない。少しの緩みが全体に影響を及ぼしかねず、工事成功のためには、どんなに小さな失敗の可能性も排除したかった。それは初めての経験であり、これが冬の大工事なのかと痛感した。

「この土地で生きる、家族を守る」

二月中旬、事務所が休みだったので半日だけ蛇籠（じゃかご）造りに参加した。三十分もすると普段身体を動かさない私はフラフラになり、休みたいという弱い心が覗くのだが、不思議と日本人として負けられないという意地も出てきた。しかし、石が重くてまともに持てない。たとえ一瞬持てても、重さに耐えきれずその石を抱いたまま腰から崩れることがしばしばあった。そんな私とは対照的に、一分一秒無駄に出来ない緊張感の中で、屈強な職員や作業員は水に浸って石をひたすら積んでいる。一つ一つの石が長い年月人々の生活を守っていく。日本からの支援はもちろんだが、現地の人々の「この土地で生きる、家族を守る」という強い意思でこの工事は進んでいると再認識した。

今までは、蛇籠の中に整然と積まれた石や柳が芽吹くのを見ると、綺麗だなと評していたが、今は言葉に表せない圧倒的な存在感や説得力を感じる。それは触れることのできる「実体」があるからである。数ヶ月前、パキスタン産日本米がなくなり、二週間ほどナンばかり食べていた時に、マルワリード用水路末端にあるガンベリ沙漠の試験農場で初めて収穫した米が精米され宿舎に届いた。この「米」がこれまでの工事の成果であり、多くの人々が事業に携わる所以である。次々生じる課題を前に呆然とすることもあるが、近道はないので、やるべきことを一つ一つ着実に熟（こな）していく。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

●事務局便り

＊三月十一日の二時四十六分、東北地方で大地震が起こったという報に接した時、言い難い不安を感じつつまだ半信半疑でした。刻々と流れ始めた映像で初めて事態の深刻さを理解し、得体の知れぬ恐怖に打ちのめされ言葉を失いました。おそらく日本中が心の底まで震撼させられたと思います。

私たちは、元ワーカーや講演会、写真展を主催して頂いた方々の安否の確認からはじめました。なかなか電話は繋がりませんでしたが、なんとかその方々の無事だけは確認できました。しかし東北、関東にお住まいの数千人の会員・支援者の皆さんの中には、かなりの方が深刻な被災のなかにあるのではないかと推察しております。東北にお住まいの方々には、中村医師と現地スタッフからのお見舞いの手紙を送らせて頂きましたが、それさえ届かぬ方がいらっしゃるのではと恐れております。地震、津波の被害だけでなく、原発事故による不安のなか、寒さと物資不足の不自由な日々、思うだに胸が塞がります。

今回の震災の報は、遠くアフガニスタンでも大きく伝えられ、現地のスタッフ、作業員からもお見舞いの声が届けられております。現地はちょうどイスラム暦で正月にあたるお祭りの時期でしたが、モスクでのセレモニーの中で「おめでとう」という言葉が自粛されたとのことです。長い戦乱と天災に苦しんできたアフガニスタンの人々故に、今回の被災の苦しみを我がこととして受け止めてくださっているのだと思います。

会員の方や元ワーカーの皆さんが、被災地でそれぞれ活動されていることも伝わってきています。会員のある医師は被災地で活動されております。医薬品、食料持参で、夜は市役所の会議室で寝袋だとのことです。事務局員有志もささやかながら協力させて頂いております。私たちは無力ですが、それでもなんとか皆さんの支えになればと願っております。皆さんが無事であって欲しいと、心より祈っております。

ペ村から――――――♪

事務局の手伝いをはじめて七～八年になるおばさんボランティアです。福岡に住んでいる特権はここで個性あふれる皆さんと共に会の仕事ができること。そして現地をよく知っている若さあふれるワーカーさんたちから、なまの現地の様子を伝えてもらえることです。おかげではるかな国だったアフガニスタンやパキスタンがとても身近に感じられるようになりました。「誰も行かない所に行き、誰もしないことをする」という困難なことを、身をもって実践されている中村先生に小さな力で協力させてもらうことで、生きがいももらっている私です。これからも細く、長く続けていきたいと思っています。（Y）

医者、用水路を拓く
アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲　用水路建設事業の7年をつづった感動の記録　【3刷】1890円

辺境で診る辺境から見る
【3刷】1890円

医者 井戸を掘る　【10刷】1890円

医は国境を越えて　【6刷】2100円

ダラエ・ヌールへの道
【重版・5刷】2100円

ペシャワールにて　【8刷】1890円

アフガン農業支援奮闘記　高橋修・編著
農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録【新刊】2500円

聖愚者の物語　甲斐大策

1890円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24　電話092（714）4838

人は愛するに足り、真心は信ずるに足る
アフガンとの約束
中村哲／澤地久枝（聞き手）
1995円

岩波書店　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　電話03（5210）4000

価格はすべて税込価格（税5%）です

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号 TEL〇九二―七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
電話092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2011年4月18日　No.107　会長　後藤哲也　現地代表　中村哲　名誉会長　高松勇雄